

# 地球のこども

CHILDREN OF THE EARTH

特集

遊ぶ、学ぶ、サステナブル。

No.219

夏号

2022

# 地球のこども

- 02 環境教育人を訪ねて 第3回 永菅裕一さん  
一緒にシャイニング（輝こう）！棚田から学ぶ原風景と食文化

## 特集 遊ぶ、学ぶ、サステナブル。

- 05 「混ぜる」「揺さぶる」「背中を見せる」がキーワード ～これからの環境教育のあり方を考える～  
萩原・ナバ・裕作（岐阜県立森林文化アカデミー）
- 07 すべての人と森をつなぎ、森と暮らす楽しさと森林文化の豊かさを次の世代に伝えていく  
萩原・ナバ・裕作（morinos）
- 09 人が地球にとってポジティブな存在になれることを伝えたい  
吉田和哉（KURKKU FIELDS）
- 11 理解は驚きにはじまる 篠山チルドレンズミュージアム  
垣内敬造（篠山チルドレンズミュージアム）
- 13 自然と資源の循環を遊びながら学べる 三富今昔村  
島麻希子（三富今昔村）
- 15 企業インタビュー：ALSOK千葉  
強みを活かして地域課題に挑む ～ALSOK 千葉のジビエ工場～
- 19 自然歩道をゆく  
自然歩道ウォーキングのすすめ [一般社団法人 日本ウォーキング協会]
- 21 退任の挨拶  
多様な人の集まりとしてのフォーラム（広場）[川嶋直]
- 23 ありがとう 30 周年  
感謝を伝え、未来を創る
- 26 自然学校の台所 グリーンウッド自然体験教育センター  
「おいしい」をシェアする仲間との暮らし
- 27 JEEF の 1 年これまでとこれから
- 29 考えるっておもしろいかも!?  
第 35 回 思考をくすぐる [鴨川光（JEEF）]
- 34 編集後記



表紙写真  
森林総合教育センター morinos

# 環境教育人を訪ねて 第3回 永菅 裕一さん (棚田LOVER's)

## 一緒にシャイニング(輝こう)！ 棚田から学ぶ原風景と食文化

文：垂水 恵美子 (JEEF 職員)

抜けるような青空に向かって、緑色の段々が連なって見える。初めて見るのにどこか懐かしく感じるその光景は、私たちの心に焼き付いた棚田の美しい景色だ。ここは兵庫県市川町。懐かしい原風景に広がる棚田の保全活動を行っているのが、NPO法人棚田LOVER'sの「シャイニング棚田くん」こと、永菅裕一さん。未来の子どもたちとその景色と日本の食文化を残すことを目指し、年間60以上のイベントを実施している。

「お米をはじめとして、大豆、小麦なども育てて、味噌や納豆をつくるイベントもやっています」

永菅さんの朝は早い。7時には棚田に赴き、作物や田んぼの様子をライブ配信。4〜5枚ある田んぼの管理やイベントの準備、打合せ等々を済ませたあと、最近始めた民宿に宿泊されるイベントの参加者と夜遅くまで語らう。文字通り「朝か



はどこから生まれているのか。

「学生の時、農家の人に言われたんです。あと5年で棚田は消えてしまいうだろうと。それは嫌だ、この美しい地元の風景を守りたいと思って、活動を始めました」

この町と棚田の風景を愛していた永菅さんにとって、あと5年というリミットは衝撃だった。

棚田LOVER'sは、永菅さんが大学4年生の時、同じ大学の仲間と立ち上げた。現在は3〜4人のスタッフを中心に、実行委員を組むなどして地元の人たちと協力しながらイベントなどを運営して

ら晩まで」  
精力的に  
動き回るの  
に、彼の熱  
意はまった  
く衰えない  
のだ。その  
エネルギー

いる。姫路、神戸、大阪から参加者を集め、これまでに12枚の棚田の再生に成功した。現在は毎週末のイベントに加え、約1000人が訪れる「棚田フェス」を開催するなどして、たくさんの方に農作業を通じて自然の美しさを体験していただいている。

「今後はホースセラピーや森のようちえんを始めることを検討しています。13年後には、世界棚田サミットを開催するのが目標です。棚田は日本だけでなく、世界の様々なところにあるので」

学生時代に団体を設立してから15年。永菅さんの挑戦は、まだまだ続いていく。活動について書かれた著書も出されたので、ぜひこちらも読んでみてほしい。



『棚田くんが行く!』購入サイト  
<https://ulfk3.hp.peraichi.com/tanadakungaku>

# 遊ぶ、学ぶ、 サステナブル。

自然の中で遊び、学び、

人の暮らしと自然の営みが共存する感覚を味わうことができる

複合体験施設が増えてきています。

今号では、環境教育の視点も大切にしつつ、

エンターテイメントやアートの要素も取り入れた

間口の広い活動に取り組んでいる施設を紹介します。

家族や友人と遊びながら

地球の未来について考える。

そんな休日はいかがでしょう。



## 「混ぜる」「揺さぶる」「背中を見せる」

## がキーワード

～これからの環境教育のあり方を考える～



萩原・ナバ・裕作 (はぎわら なば ゆうさく)

岐阜県立森林文化アカデミー教授。「野外自主保育 森の  
だんごむし」(2008)、「冒険遊び場 みのプレーパーク」  
(2011)、「morinoco ナイフ」(2017)、「森林総合教育セ  
ンター morinos」(2020)の言い出しっぺ。2021年  
JOLA 大賞受賞。



## 環境教育このままでいいの？

地球温暖化やSDGsなど、見えな  
い概念や知識を子どもたちに伝えるこ  
とが本当に持続可能な社会づくりにつ  
ながるのでしょうか？

今までの日本の環境教育は効果が  
あつたのでしょうか？

社会や人々の行動は、良い方向に変  
化したのでしょうか？

私ナバが環境教育について最近思うこ  
とを、気ままに書いてみました。

## 子どもは「たね」!?

岐阜県立森林文化アカデミーで教員  
を始めて15年、生きた学びの場を創ろ  
うと学内で森のようちえんやプレーパ  
ークを実践してきました。日々、森の中  
で成長する子どもたちの姿を見ている  
うちに、あることに気づいたのです。  
森のようちえんやプレーパークには、  
遊具はありません。あるのは空間と、  
道具と仲間たち。そんな中、子どもた  
ちは、あそびを創り出し、道具も見よ  
う見まねで使いこなし、日々起る問

題も自分たちで解決します。もちろん  
途中で何度も失敗し、痛い目にも会い  
ます。でもこうして、手探りで何かを  
獲得すること、何かを創り出すことこ  
そが、本来の「学び」であり「生きる  
こと」であると感じました。

そうなんです。子どもたちには「学  
ぶ力」「生きる力」が生まれながらに  
備わっています。それはまるで植物の  
「たね」そのもの。条件が揃えば誰か  
らも教わることなく自らの力で芽を出  
しぐんぐん育ち、それぞれのペースで花  
を咲かせ、やがて実を結びます。だから、  
私たちが教えられることなんてほとん  
どないんです。

## これからの環境教育のあり方？

じゃあ私たち大人は、一体何をしたら  
いいんでしょう。確かなのは「これ以上  
情報はいらぬ」ということ。それより  
も子どもたちの「たね」が発芽して成  
長するための環境を整え、邪魔をしない  
よう応援していくことが、これからの環  
境教育だと思います。そのために大切だ  
と思うことを、3つだけ挙げてみました。

ナイフも  
試行錯誤を繰り返  
し思い通りに使え  
るようになる



全身を使って  
興味を  
追求する



異なるものが  
混ざる場所を創る  
|| 「豊かな土壌」

まずは、環境教育の間口を広げ、多種多様なものが混ざり合える空間にすること。遊び、アート、音楽、グルメ、ファッション、DIY、文学など、なんでもOK。異なるアイデアや考え方、価値観が混ざり合い、人と人が響き合う空間は、タネが育つ「豊かな土壌」になります。子どもはたくさんのお会いの中で育つのが一番です。

心と身体を  
ゆさぶる  
リアルな体験



2  
身体全体の感覚を通して  
心揺さぶられるリアルな体験と遊び

知識や情報ではなく、「楽しい!」「嬉しい!」「気持ちいい!」そんな体全体の感覚を通して、心揺さぶられるリアルな体験や遊びこそが、子どもたちが将来行動を起こす際の原動力になります。人間の行動は、アタマ(知識)ではなく心(感情)によって突き動かされるからです。IT化・バーチャル化が更に進むこれからの時代、人間としてバランスを取るためにもこうした経験は欠かせません。また、リアルな体験や遊びの中で、トライ&エラーを重ねてゼロから何かを創り出す経験は、将来、理想的な社会を創り上げる際の確かな力へとつながるでしょう。

子どもは大人の  
真似をするのが  
大好きだ

3  
素敵な背中を見せていこう!



子どもたちは、言われたこと、教わったことよりも、周りの大人を見たり、社会の雰囲気を感じたり、体験したり発見したりしたことを吸収して身体全体で理解します。SDGsについて文字や映像で学ぶより、食べ物を育てる、家を作る、服を縫うなど、暮らしのリアルなプロセスを日々横で見ながら成長することの方がはるかに良い刺激となるでしょう。だからこそ私たち大人が、「暮らしも遊びも、楽しみながら幸せな未来を創っている」そんな背中を見せ続けることこそが、何よりも効果的な環境教育のあり方だと私ナバは確信しています。



morinosのセンターハウス



国内初の森林総合教育センター **morinos** (モリノス)

岐阜県美濃市曾代 88 番地

<https://morinos.net/>

## すべての人と森をつなぎ 森と暮らす楽しさと森林文化の豊かさを 次の世代に伝えていく

### morinos誕生!

2020年7月22日、岐阜県立森林文化アカデミーの敷地内に国内初の森林総合教育センター「morinos (モリノス)」が誕生しました。当日ぶらっと来て、寝転んだり、穴を掘ったり、焚火をしたり、端材で自由な工作をしたり、泥まみれで遊んだり…。子ども時代に必要な、水・土・火・風・木の要素に思う存分に触れて遊べる「morinosひろば」は大人気。

この他にも音楽、アート、健康、木工、自然体験など、多様なテーマで展開される予約型イベントも充実しています。学校団体受け入れや、指導者研修会、保育園、小中学校への森の体験の出前も展開中。そんな、森と人をつなぐ「実験場」morinosでは、次に紹介するようなアツいマインドを胸に、カオスのような現場でスタッフ一同、毎日楽しく奮闘しています。

土も水も  
子どもたちの  
成長には欠かせな  
い要素のひとつ

#### ● 学ぶではなく感じる

「森を学ぶ」のではなく、「森を感じる。森で遊ぶ」ことを大切にしています。すべての行動は知識ではなく、心や感情が原動力だと考えているからです。

#### ● 部分ではなく全体

森を断片的ではなく全体的にとらえる視点や感覚を紹介しています。プログラムの切り口も多種多様。森を見る眼鏡（視点）が増えるほど人生も楽しめちゃうんです。

#### ● とんがりワクワク実験場

「いいね」「面白そう」と思ったらまずは「やってみる」。morinosは前例を創るフロンティアであり続けたいと思っています。行政だからこそ失敗を恐れず、行政だからと言い訳もせず、子ども達をしっかりと見習ってトライ&エラーを繰り返しながら成長します。

遊び場は  
みんなで創るのが  
一番オモシロい



はだしの  
広場からつながる  
森を歩くと  
新しい発見が  
きっと見つかる



● みんなで一緒に作る

自分たちの空間は、みんなで一緒に学びながら、そして楽しみながら作るのが基本。暮らしても、社会も、そして幸せも、誰かに作ってもらうのではなく、自分たちの手で楽しみながら作る。そんな大人たちの背中を子どもたちに見せ続けていきたいと思っています。

● 臨機応変・柔軟に変化し続ける

私たちが対象にしている森と人は、どちらも予測のつかない相手です。プログラムも作り込んだり固めたりせず、臨機応変に対応できるように走りながら作り続けます。だから morinos 自体も永遠に未完成です。

morinosの3本柱

社会課題に対して、「行政だからこそできること」「やるべきことは何か」を真剣に考えた結果、morinosでは今、次にあげる3つのことをメインに活動しています。

● 森と人をつなぐ間口の広い実験場

より多くの森のファンを増やすため、一味違う切り口で森を楽しめる体験を紹介しています。清水建設株式会社との共同研究で「はだしの広場」も誕生！それをきっかけにみんなで作る「はだしの森づくり」も始まっています。

● 保育・教育現場の森の体験 日常化サポート

持続可能な社会をつくるには、森で遊ぶことの重要性に理解ある親の子どもだけでなく、すべての子どもたちが共通体験を持つことが重要です。そこで学校や保育園に出かけ、地域の森を発掘&整備して森の体験を日常化するお手伝いをしています。住友林業株式会社

森と人がつ  
なると持続可  
能な社会になる  
はずだ



森の体験出前カー morino de van

● 指導者の育成・交流

日々子ども達と接する保育士や先生が森の楽しさを知らないと、子ども達の森の体験の日常化は実現しません。そこで保育・教育現場の先生向けスキルアップ講座や、現場実習や交流にも力を入れていきます。県教育委員会の教員研修や地元の大学の保育士養成課程の合宿や実習現場提供も行っています。

以上、morinosの活動を大雑把に書いてみました。やはり文章で伝えるのは難しい!!まずは、身体全体で「感じ」に来てください。また、ウェブサイトに日々の様子が分かる動画がたくさんあるので、ぜひそちらをお楽しみください。


**KURKKU FIELDS** (クルックフィールズ)

千葉県木更津市矢那 2503

<https://kurkkufields.jp/>

# 人が地球にとって ポジティブな存在に なれることを伝えたい

**吉田 和哉** (よしだ かずや)

幼い頃から自然や生物が大好きで、大学では保全生態学を学ぶ。ビジネススキルを磨くために一般企業での営業経験を経て2020年10月に KURKKU FIELDS に入社。「自然の価値や魅力を伝える」ことを人生のミッションとし、現在は場内の循環の仕組みづくりや自然体験ツアーを企画運営。



旬の食材を農場で  
味わえます  
(BBQ は要予約)

クルックフィールズは農業や食、アートをテーマにしたサステナブルファーム & パーク。次世代も使い続けられる農地を目指して有機農業を行いながら、場内では農場の恵みをふんだんに使った食事が楽しめます。また、畑や森ではゆったりと過ごしながら、自然の中で過ごす楽しさ、心地よさを感じることができます。人が自然とともに生きる本質的な喜びを表現しながら、持続可能な社会の実現に向けた循環の仕組みづくりを行っています。

## 農業と食、アート

農場では有機農法でたくさん野菜を栽培しながら、牛や鶏を育てています。土地の開墾から10年以上かけて土づくりをしている畑では、毎年色とりどりの美味しい野菜を収穫。ダイニングやベーカリーでは、季節ごとに採れる農場の旬の恵みを使ったランチやパンをお召し上がりいただけます。また、貴重な水牛のミルクを使ったモッツアレッタチーズや、ブラウンスイス牛の甘みの

あるスッキリとした味わいのミルクと平飼いで育った純国産鶏のコクのある卵を使ったシフォンケーキなど、場内で大切につくった食材でこだわりの料理やスイーツを作っています。食肉を取り扱っているシャルキュトリーでは、木更津で獲れたイノシシやシカなどの肉を使ったハムやソーセージを製造。自然の恵みを余すことなくいただき、命の大切さ、ありがたみを感じてもらえるようなモノづくりを行っています。

食事が済んだ後は、場内を歩いてみてください。場内には豊かな自然環境とともに、畑や森の中にアートも点在しています。自然と融合したアートは、私たちに感動やインスピレーションを与えてくれます。

## 循環の仕組みと自然環境

私たちは牛や鶏からミルクや卵などの恵みをいただきますが、同時に副産物としてたくさん排泄物も出てきます。また、広い場内のメンテナンスでは大量の刈り草が出たり、飲食店でも野

四季を通して様々な生き物が姿を見せてくれます



自分で収穫した野菜はとびきり美味しく感じます



菜クズや食べ残しが出たりする他、トイレやキッチンではたくさんさんの水も使います。糞尿や野菜クズなど、生活する上で出てくる副産物は、いやな匂いがし

たり、病原菌の温床になったり。豊かな暮らしを営む裏で、これらはネガティブなものとして「ごみ」と呼ばれますが、クルックフィルターではこれらのネガティブなものも、どうすれば『大切な資源』としてポジティブなものに変換できるのか、日々試行錯誤しています。

具体的には『エネルギー』、『土』、『水』の3つを循環させることで、循環の仕組みを作り上げています。

動物の排泄物や野菜クズ、刈り草は人間が管理することで堆肥化し、畑づくりに大切な土の素に。場内で使う水は地下から汲み上げ、使った後は浄化槽を通った後、バイオジョフィルターという仕掛けを通してから自然に還します。

排水は下水道を通してしまうと、排水に含まれる貴重な栄養素をその土地に留めることができず、また、何も処理をしないと河川を汚染し多様な生き物が棲みづらい環境に変えてしまう厄介者。しかしバイオジョフィルターによって、排水の汚れの元となる過剰な栄養

分を微生物や植物に分解、吸収してもらうことで、青々とした緑地ができ、水が浄化された後のビオトープにはオタマジャクシやヤゴ、ゲンゴロウなどたくさんさんの生き物が戻ってきました。

クルックフィルターでは、私たちが暮らしを営むことで、たくさんさんの動植物が姿を見せてくれるようになりました。お客様の楽しみ方は人それぞれで、畑で野菜を収穫したり、美味しい食事を食べたり。遊びに来る子ども達は、春にはカエルの鳴き声を聞いたり、夏には森でクワガタムシを探したり、年間を通じて自然の移ろいを楽しんでいます。

人間が暮らすことで自然環境にネガティブな影響を与えるのではなく、人間が暮らすことでたくさんさんの命で賑わう多様な環境が整う。そしてその自然環境によって私たちは支えられています。ぜひ人が自然とともに生きる本質的な喜びを感じに来てください。

竹の  
スーパーボール  
流し

篠山チルドレンズミュージアム

兵庫県丹波篠山市小田中 572

<https://www.chirumyu.jp/>

# 理解は驚きに はじまる

## 篠山チルドレンズミュージアム

垣内 敬造 (かきうち けいぞう)

篠山チルドレンズミュージアム(ちるみゅー)館長。兵庫教育大学教授。丹波篠山市教育委員。NPO 里地里山問題研究所理事。自らのデザイン事務所を運営しながら2000年よりちるみゅーのボランティアに参加していたが2012年に突然休館、2013年再開し館長として運営を始める。丹波篠山市生まれ。



### チルドレンズミュージアム が目指すもの

チルドレンズミュージアムは、実は世界中にあることをご存知でしたか？10年以上前にアメリカで生まれたブルックリン・チルドレンズミュージアムは、芸術科学研究所の移転のため整理された所蔵品を子どもたちのための教材として再利用したと言われています。しか

### チルドレンズ ミュージアム 外観



し、それらの展示品はガラスケースに収められたお宝としてではなく、子どもたちの好奇心を呼び起こすための教材として活用されたのでした。その後、各都市へ、そして各国へと広まり、現在では世界360を超える都市にチルドレンズミュージアムがあると言われています。それはチルドレンズミュージアムが各地域に根ざした多様性のあるミュージアムであることも意味しています。

兵庫県の山間の小さな町・丹波篠山にあり、廃校になった中学校の木造校舎を再利用した篠山チルドレンズミュージアム(愛称:ちるみゅー)もその一つに過ぎませんが、地域に根ざすという意味ではたった一つのミュージアムであると言えます。ちるみゅー設立時には「子どもたちの創造性と生きる力を育むため」として、4つのテーマ「食と農」「仕事と職業」「自然と科学」「心

### ひみつ基地



とからだ」が設けられました。これらは地域資源を活かすことを前提としており、子どもたちの育成はもちろん住民参加による地域創造の拠点となることも目指しています。

### ハンズオン展示と ワークショップ

現代のミュージアムでは当たり前的手法と言える「ハンズオン展示」(触って体験できる展示)や、「ワークショップ」(体験を通して協働で課題に取り組む学習)ですが、チルドレンズミュージアムはその草分け的



かまど

竹のビー玉  
スライダー



ひみつ  
ボックス



な存在でした。ちるみゅーも20年前の設立時から主眼としていて、現在も大切にしています。

ちるみゅーの展示物のほとんどがハンズオン展示、というよりは遊び道具となっていて、遊びを通して「わくわくドキドキ」を感じると共に人間関係も学ぶように考えられています。例えば「ひみつボックス」という展示コーナーには、タイトルだけで中身が見えないおもちゃ箱が多数置いてあり、子どもたちはどれでも借りて遊ぶことができるのですが、勝手に持ち出すことはできず、スタッフに声をかける必要があります。スタッフはその子の発達段階を考えながらおもちやの遊び方を説明するなど、大人と子どもがコミュニケーションをとる機会を作っています。ボックスの中には市販の知育玩具なども入っていますが、スタッフの手作りのものや、地域のボランティアさんたちが手作りした木工作品・手芸作品などが入っていて、住民参加の機会にもなっています。

ワークショップは、最も大切にしている子どもと接する機会です。先の4つのテーマに沿って、ちるみゅーを取り巻く自然環境や、地域文化などの教育資源を活かして企画します。例えば竹を使った工作では、施設に隣接する里山の竹を切るところからはじめ、植生や

ときには竹害など生物多様性の課題に思いを馳せたりします。地元特産品を使ったお料理のワークショップも実施しますが、ガスではなく昔ながらのかまどや薪のオーブン窯などを使用します。かまどで火吹竹を吹く体験などは一緒に参加する保護者世代にとっても珍しい体験であり、親子での思い出として残るようです。

ワークショップを主催する大人はファシリテーター(子どもたちの伴走者)という立場を重視し、先生やリーダーとして子どもたちより上位に立たないように気をつけます(といっても、危険は避けるように促しますが)。上位に立つて答えを教えることは簡単ですが、子ども

もたちが自ら気づくことを大切にしたいと考えるからです。気づくことの方が身につき、学びの効果が高いことは明らかです。

### 生きる力と 持続可能な発展

”理解は驚きにはじまる“は、ちるみゅーをプロデュースした目黒実さんが著した書籍『学校がチルドレンズミュージアムに生まれ変わる』の帯に記された言葉です。子どもたちが遊ぶ体験(＝ハンズオン展示やワークショップ)を通して驚き、興味を持ち、他人と協働して主体的に学んだことは深い理解を得て生涯忘れることがないものになります。それはつまり生きる力につながります。丹波篠山も日本の多くの地方と同様に過疎化・少子化という課題を抱えています。未来に向かってそんな子どもたちを地域の大人が育てることはいずれ地域への報酬となり、地域の持続可能な発展につながると考えて、ちるみゅーを運営しています。



三富今昔村の玄関口となる「くぬぎの森交流プラザ」



三富今昔村 (運営：石坂産業株式会社)

埼玉県入間郡三芳町上富 1589-2

<https://santome-community.com/>

## 自然と資源の循環を 遊びながら学べる 三富今昔村

島 麻希子 (しま まきこ)

くぬぎの森環境塾の専任講師。「三富今昔村」を生きた教材として利用し、「体験型」環境教育プログラムを国際規格29993に基づきデザインしています。三芳町や地元農家と連携した農業体験のコーディネータ、社会科見学や課外授業、研修で受け入れた学校・企業・団体の講師を務めています。



### 「三富今昔村」は 自然・社会体験の サステナブル・フィールド

「三富今昔村」は、東京ドーム約4個分の面積で、埼玉県の三芳町、川越市、所沢市にまたがり都心から1時間以内の距離にあります。マイクロ・ツーリズムとしては、最適な場所と言えるでしょう。30年前の江戸時代から続く「三富新田」の里山を保全再生し、2016年に「三富今昔村」として一般開放した体験型施設になりました。昨年度はコロナ禍にも関わらず、50,000名を超える人々が来村されました。オープンしてからサーキュラーエコノミーに取り組む先進施設として、世界30カ国から見学に訪れています。ランドマークの「くぬぎの森交流プラザ」は、地域で代々受け継がれてきた養蚕農家の建物を復元し、昔ながらの宮造り工法で建てられました。三富今昔村のセンター機能のほか、地域住民の憩い癒しの広場、四季の旬のイベント会

場、講演・展示会の場所として、幼児から高齢者まで多世代が幅広く利用しています。

落ち葉を堆肥にした江戸時代からの伝統農法を継承し、有機JASやG・GAPの認証を受けたオーガニック野菜を栽培するファームがあります。収穫した野菜を洗い、そのままバーベキューで味わう、地産地消型の食農体験(ベジタブル・スクール)ができます。夏場は星空を眺めそよ風を感じるアウトドアナイトで幻想的な里山空間を堪能し、冬場は野外のサークルファイヤーで暖をとりながら焼き芋を頬張る体験もできます。

令和時代に、生活シーンに里山を取り入れるライフスタイルが定着してきました。お洒落なランチを優雅に楽しむ女性の姿や、祖父母と両親と子どもが三世代で手をつなぐ風景、ベビーカーを囲みながら井戸端会議をするママ友等等など：三富今昔村内では微笑ましい風情やSNS映えする光景が、四季に渡り至るところで見受けられています。



## 遊び・学びを演出する 専門スタッフとアクティビティ

最近では、親子で身近に遊べる自然が減少しています。自然を駆け巡り草原の息吹を感じ、小鳥や虫の音を聴く機会が、スマホ等の普及により遠のいています。

このような社会現象の中で、里山では輪投げやツリーハウス、アスレチック、やまゆり鉄道（ミニSL）など自然の中で遊び・学べる環境を創ると共に、失われつつある日本の伝統行事のひな祭り、端午の節句、七夕の節句、餅つきなどイベントを企画し、リアル体験の場を提供しています。楽しさや感動を演出するために、スタッフは他の施設をベンチマーク型で視察研修し、専門力を高めています。

また、2013年には、埼玉県から環境教育等促進法に基づく「体験の機会の

場」の認定を取得しました。地元の小・中学校を社会科見学や課外授業で受入れ、郷土愛を育んでいます。大学生には、学生と社会人向けの架け橋としての講座、フィールドワークやホスピタリティのプログラムを開講しています。

最大の特色は、「自然の循環を学ぶ里山」のほかに、「解体された家屋の資源循環について学ぶ」リサイクル施設があることです。見学者専用の通路を設け、安全で安心して学べる環境を整えています。子供は、大型の搬入車両や重機の動く働く車に興味を寄せ、ワイワイと楽しみながら3Rを学んでいます。大人は、社員が生き生きと働く姿（ウェルビーイング）や笑顔の挨拶に接し、社



小学校社会科見学授業の受け入れの様子

員の品格やホスピタリティに驚いているようです。AI搭載の選別ロボット等の見学を通し、多くの人々に「循環をデザインする」石坂産業の価値に共感してもらっています。今や企業・団体様のガイドツアーは、三富今昔村の二つの風物詩と言えるでしょう。

今後は、体験農園RedAICH Iが5月にオープンするほか、夏にはオーガニック野菜を使用したこだわりの和食メニューを提供するSatoyama Café「MEGURU」もオープン予定です。ぜひ一度遊びに来てみてください。（三富今昔村への大人の方の入場は有料、工場見学は予約制です。ご来場の前にはウェブサイトをご確認ください。）



くぬぎの森散策路の様子

## 強みを活かして 地域課題に挑む ALSOK千葉のジビエ工場

ホームセキュリティで有名な警備会社のALSOK（アルソック）が、捕獲した野生鳥獣の肉をジビエ料理として活用する異業種の取り組みを始め、注目を集めています。警備会社の強みやノウハウを活かして地域課題の解決を目指すチャレンジについて、ALSOK千葉の竹内崇さんにお話を伺いました。

聞き手：鴨川 光（JEEF）

お話を伺った方

ALSOK 千葉  
地域支援事業担当  
竹内 崇さん



——警備会社がジビエ分野に参入したというところで大変興味深いのですが、どのような取り組みなのか教えてください。

弊社はALSOK千葉と言いまして、ALSOK総合警備保障株式会社の子会社として約50年前に設立されました。社員は500名ほどいますが、今回紹介するジビエ工場で働いている10数人を除くとほとんどが警備員です。

工場は千葉県の茂原市というところにあつて、止め刺しから解体、加工までを一手に行えるようになっています。弊社の売りは、警備会社ならではの食の安全性です。警備というのは何か事故が起こったら今までやってきたことがパーになる

ぐらい評価が失墜してしまう事業ですので、とにかく何事もリスクを避けるといふ考え方を非常に強くもって取り組んでいます。

——具体的には、安全性を高めるためにどのようなことをされているのですか？

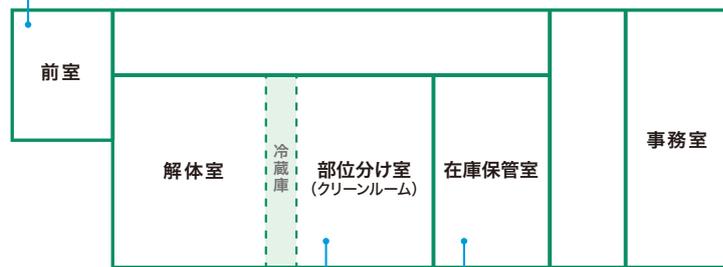
ジビエというまったく専門外のことをやり始めましたので、とにかくやれるのを全部やろうということ、E型肝炎の検査、放射能検査、肉や施設のオゾン消毒などさまざまな取り組みを行っています。

特に力を入れているのは、特許も取得した独自の食肉管理システムです。千葉県の場合、野生鳥獣

は捕殺してから30分以内に加工するというルールなのですが、山の中で殺してしまうと加工場に着くまでにタイムオーバーしてしまいます。そこで、そのイノシシがいつ・どこで・だれに捕獲されて、それがいつ食肉になったのかという一連の工程を、データと写真や位置情報できちんと証明していくかと考えました。これは、貴重品運搬車や現金輸送車の動きを把握する警備のシステムと考え方が類似しています。

——警備会社のノウハウが活かされているのですか？

農作物の被害が増えてから、猟友会の方や農家の方があちこちに箱罠をかけてイノシシを捕獲してい



※捕殺されたイノシシやシカの約9割は、山に埋められたり、焼却処分されている。

ます。しかし、罾を仕掛けたら毎日仕掛けた所を見回る必要があります。我々は2014年から捕獲の事業を茂原市から委託を受けてやっておりますが、元々は仕掛けてた罾を見回る手間を減らすために、

セキュリティのシステムを応用してイノシシが入っているかどうかを把握する仕組みを開発しまして。それを売り込みに行ったところ、捕獲もやつてくれないかとお話をいただきました。

それで捕獲事業を開始したのですが、当初は我々も罾にかかったイノシシを他の方と同じように埋めたり焼却場に持っていくつもりでしたが(※)。しかしやり始めてみると、高齢化が進んでいる農家や猟友会の方はこれだけの重労働をどうやっているんだろうと考えるようになりました。我々は警備員なので屈強な者が多いし、車も持っていますし、じゃあうちで回収しましょうと。

——どのようなプロセスで回収されているのですか？

我々は市から罾の認可をもらっている捕獲従事者の方と個別に契約をしています。その方々から、箱罾にイノシシがかかると連絡があ

り、我々が自社のトラックで現場に向かつて、捕獲者の確認、それからイノシシに怪我や皮膚病がないかを確認して、問題がなければお引き取りしています。その際に写真を撮って、GPSで捕獲された場所と日時をオンラインでデータ化しています。そうして、生きたまま工場に運んで止め刺しした証拠を残すわけです。また、移送途中にイノシシが死んでしまわないように、車はクーラーが付いた保冷車を使います。一晩じゅう箱罾の中で暴れ回っているのです、特に夏は弱ってしまうためです。

——そこまでしっかりとトレーサビリティを確保しているのですね！

この後、工場では表面の汚れやダニを洗浄して止め刺しなどの前処理という流れになるのですが、最終的にはお肉として売るので、茂原市の職員が毎日いらして個体や安全性の確認作業があります。市によ

る確認後に止め刺しを行い、補助金を受けるための手続きのために尾っぽを証拠として切り取り提出します。さらに雌雄などの個体情報や、止め刺し後の写真も提出する必要があります。こうした手続きを本来は捕獲した個人がやらな



右：箱罾で捕獲されたイノシシ、捕獲には自治体の許可が必要です。  
左：イノシシを搬送用ケージに移し、加工場まで運びます。

屋外で洗浄し、前室（前処理室）に運び込みます。



部位分け作業、厳格な衛生管理のもと、肉の知識と、高い技術が必要です。



電動チェーンブロック、100 kgにもなるイノシシ等を吊り下げ、計量、移動します。



なければならないので大変ですよね。

弊社は、捕獲したイノシシを無償で委譲していただく代わりに、補殺、搬送、埋設（焼却）など処理業務および、その際に発生するいろいろな手続きを代行し、自治体からいただく補助金（約1万円）がそのまま捕獲者の方に入るという形をとっています。我々は加工したお肉を販売することで収入を得るという仕組みです。

—— 個人でやるのが大変な部分をすべて代行していただけるの助かりますね。

ジビエ加工は手間がかかる割にお肉があまり取れませんか、加工しやすいサイズの個体しか引けない夏場は受け付けませんといった加工場もあるんですね。また、加工するだけでも手間なのに、加工場が車を出して回収までするなんていうのは聞いたことがない。止め刺し済みのものを持つてきたら買い

取りますというところも多いですが、それだと止め刺しから加工までのプロセスがややふやになってしまいます。やはり人が食べるものなので、最高度の衛生管理が必要だと思います。

ジビエ肉は、製品になるまでのプロセスが見えにくいというのが販売のネックになっていますので、弊社のジビエ肉はQRコードで、誰がいつ捕まえて、いつ止め刺して、いつ加工されたかというのが全部わかるようにしています。

—— これだけ手間がかかっていますが、どのぐらいの頭数を加工されているのでしょうか？

昔から千葉にも加工場はあるのですが、年間約25,000頭捕れているのに、500くらいしか加工場に持ち込まれていません。弊社は始まってから一年半くらいですが、もう1,000頭くらい加工しています。これほど大規模にいきなり始めるというのは珍しいと思います。

—— 実際にお肉はどういったところに販売されているのですか？

弊社はB to Bとして、ホテルや茂原市内の飲食店に卸しています。欧州で修行されたシェフの方は、日本では安心できるジビエが安定的に手に入らないという問題を抱えていました。そういった方々からは、弊社は設備とスタッフが整っているので、非常に安定感があつてお肉の質がほとんど変わらないと評価をいただいています。

—— 今後の可能性として、食肉以外の展開も考えていらっしゃるのでしょうか？

生きているイノシシを捕獲したら回収しますという契約なのですが、大きすぎて運搬用ケージに入らないというものは、その場で殺して回収することもあります。ただし、その場合は食肉にできないので、工芸用に皮をとつたり、骨や肉をペット用に加工したりしています。



急速冷凍機（プラスチック＆ショックフリーザー）で、鮮度を保ちます。

——やはり野生の肉に近いと反応が全然違うんですね。

元々は小さすぎてお肉にならない個体をどう活用しようかということ動物園に話をしてみたところ、あまりにも動物たちの反応がいいので、今後は他の動物園にも広げていこうという話もあります。

いずれにしても、大きかろうが小さかろうが、お肉をほとんどとれなからうが、全部回収して全部手続きをします。やはりイノシシも害獣って言われていますけども、自然の中で一生懸命生きてきたわけですから、食物として殺すんだじゃなくて、やっぱり尊崇の念を持って真剣に取り組むという気持ちはありますね。

——JEEFでも大日本猟友会さんと一緒に、親子に対してジビエのことを伝えていくというモニターツアーを始めたのですが、大変人気でした。これから先の展開として、一般の方に環境教育や普

及のイベントのようなことを考えていらっしゃいますか？

少しずつですが、地元の大学や地域のみなさんに対して見学会やセミナーなどをやり始めています。お肉の直販会もやったのですが、ジビエに対してのみなさんの認識がまちまちであったり、ジビエ肉に関して臭みや衛生面で不安が大きいうこともわかってきました。そういった不安を解消していくことが、普及のためには大切だと感じています。

——最後に読者の方へメッセージをお願いします。

弊社もこれで大儲けしようとは思っていません、地域貢献であったり、市役所や捕獲従事者の方が喜んでくださったりするのを励みに頑張っています。そしてジビエが安全なお肉に変わりつつあるというのがわかれば、全国で捕獲されたイノシシやシカが大量に廃棄されてし

まっている状況も変えられるんじゃないかと。イノシシたちが山で暮らして、人間と共生できるという未来へ最終的には繋がっていくのかなと思っています。いろいろな方と意見交換をしながら少しずつ我々も学んでいますので、今後のみなさんからのご意見や批評も取り入れながらもっとと進めていきたいなと思います。

ジビエ料理となったイノシシ肉（ハンバーグ、カレー）





# 自然歩道をゆく

## 首都圏自然歩道 ～関東ふれあいの道～



### 一般社団法人 日本ウォーキング協会

社団法人日本ウォーキング協会 (JWA) は 1964 (昭和 39) 年 10 月 17 日、おりから「東京オリンピック」が開催されていた東京で「歩け歩けの会」として誕生。日本の数多くの人々に楽しく、健全な生活をもたらすウォーキングを多くの方々に親しんでもらう団体として、全国各地でウォーキング大会やウォーキング教室を開催しております。

### 自然歩道ウォーキングのすすめ

ウォーキングは、人類誕生から数百年たつても変わらぬ最も自然で基本的な身体活動です。

直立二足歩行（ペタリズム）という手段を手に入れた結果、手が自由になり、脳が見事な進化を遂げ、思考力・判断力・想像力・創造力などの情報を高度に活用する知恵、人として生きる力を手に入れました。

### 歩くことと頭がよくなる!?

歩くことを続けることでは大脳前頭葉を刺激して、「セロトニン神経系」を活性化し、自己抑制力や集中力を高めるといわれています。勉強も集中できずね。そして、歩くことで体力も養われます。災害の多い日本では、歩いて避難しなければならぬことがあるかもしれません。歩くことはとても大切です。

自然のすばらしさを満喫しながら歩くことは、五感を刺激し、ストレスの発散や心のリフレッシュにとっても効果的です。歩きながら自然を観察したり、発見したり、自然の多様性や不思議さの気づきを体験的に学ぶことができ、親子で、グループでとても楽しむことができます。

### 首都圏自然歩道

(関東ふれあいの道) に ついて

ここで首都圏自然歩道をご紹介します。関東地方、一都六県をぐるりと一



周する長距離自然歩道で、総延長は約1,800kmです。東京都八王子梅の木平を起終点に、高尾山、奥多摩、秩父、妙義山、太平山、筑波山、霞ヶ浦、九十九里浜、房総、三浦半島、丹沢などを結んでいます。美しい自然を楽しむばかりでなく、田園風景、歴史や文化遺産にふれあうことのできる道です。より多くの人々が利用できるよう10km前後に区切った日帰りコースを160コース設定し、それぞれの起終点が鉄道やバス等と連絡できるようになっています。

## おすすめの自然歩道

### ① 首都圏自然歩道群馬県No.1 「三波石峡」のみち

48個の石にそれぞれ名前があり、みつげながら歩くことができます。お子さ



### 「三波石峡」のみち

<https://www.city.fujioka.gunma.jp/material/files/group/31/sanbaseki.pdf>

んでも楽しくウォーキング（ハイキング）ができます。その先には首都圏のみずがめとよばれている神流湖（下久保ダム）。夏はカヌー体験もできるなど、歩く距離は5kmほどですが、自然をおおいに満喫することができます。ウォーキング協会もウォーキングキャンプを神流湖周辺で行っています。夏休みの自由研究に、ご家族とのハイキングにぜひご利用ください。

### ② 首都圏自然歩道埼玉No.3 「長瀬と自然と歴史を学ぶ道」

この道はライン下りや大きな岩畳で有名な「長瀬」や「宝の山」に登ります。その名も「宝登山（ほどさん）」といえます。金運アップのパワースポットといわれる宝登山神社を超えると宝登山です。ロープウエイで登ることもできますが、一度は登ってみましょう。頂上では秩父の山々を見ることができ、素晴らしい景色です。関東といわれる蜃梅（ろうばい）も見ることができ、距離は8・8km、川も山も楽しむことができます。ご家族向きのコースです。



### 長瀬と自然と歴史を学ぶ道

<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/4756/no7gaiyoumen.pdf>

一言に自然歩道といっても、見える景色や体験できることは様々です。みなさまもぜひ自然歩道を歩いてみてください。

自然歩道関係功労者表彰（環境省）

<https://www.env.go.jp/press/109242.html>

## 退任の挨拶



川嶋 直

# 多様な人の集まり としての フォーラム

(広 場)

このたび私、川嶋直は公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）の理事長を退任することになりました。2014年6月のJEEF総会・理事会で理事長に専任されて以来ちょうど8年になります。この8年間、

JEEF理事・監事の皆さん、会員の皆さん、そして職員の方々と、日本の世界の環境教育の推進に向けた働きが一緒にできたことを深く感謝しています。ありがとうございました。

また、この間協力して事業を進めさせていただいた行政、企業、団体の多くの皆様にも心からの御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。どうぞ、引き続きJEEFとの協働をよろしく願います。

### JEEFのはじまり

日本環境教育フォーラム（JEEF）は1992年に誕生

しました。1987年から毎年秋に山梨県清里のキープ協会清泉寮を会場に開催されてきた「清里環境教育フォーラム」の5年間の成果を引き継いで、新たに会員組織としてスタートしました。

清里環境教育フォーラムは「5年経ったら止めよう」「5年間は頑張つて続けよう」「5年の成果物として本を出版しよう」「現場の若い方たちに参加してもらおう」という3つの目標を持つてスタートしました。5年間、毎年秋に100名を超える方たちが清泉寮に集いました。5回のフォーラムを終えた後、1992年7月に「日本型環境教育の提案」を小学館から出版することが出来ました。3つ目の目標の「現場の若い人」は、募集条件に○歳以下と書く訳にも行きませんでした。本来に様々な立場の幅広い年齢層が集まりました。こ

のフォーラムそのものが多様性の象徴でもあったと思っています。

### 広場とは

清里環境教育フォーラム（1987年～1991年）では事務局長をしていましたが、その間良く電話で尋ねられたことがありました「清里環境教育フォーラムの環境教育の範囲ってどんな感じなのですか？」と





いうお尋ねでした。僕は頭を掻きながら「範囲と言っても難しいですね」ととぼけ続けました。フォーラムとは広場のことです。広場を示す時には2通りの方法があります。柵を作ったことから中が広場ですよという方法。もうひとつは、大体広場の中央に噴水を置いて柵は作らない方法。「広場で一番多く人が

集まっている場所は、噴水のあるところだけど、特に境がない」という方法です。私達はこの2番目の方法をずっと（実は今も）取り続けています。そうすると、いろいろな人がやって来るのです。芸術家も新聞記者も学生も：「柵がないから自分は中心じゃないけど広場全体に興味があるから行ってみよう」という人の集め方、集まり方です。これも多様な人が集まる工夫だったのかも知れません。

### 理事長として

JEEFが誕生してから今年で30周年になります。1992年任意団体日本環境教育フォーラムとしてスタートし、1997年には環境庁所管の社団法人となりました。さらに2010年には内閣府所管の公益社団法人日本環境教育フォーラムへと法人格を変えてきました。

私が理事長として十数名の職員と一緒に仕事を始めたのは2014年6月末、当時は新宿5丁目に事務所がありました。2016年5月には事務所を現在の荒川区西日暮里の日能研ビルに移しました。会議をするスペースも増えました。このことはこの2年数ヶ月のコロナ禍の中で、オンラインでの配信業務が増えたことへのスムーズな対応に大いに寄与しました。

私がJEEF理事長になった頃と現在を比較して、明らかにスタッフのファシリテーション能

力は高くなったと思います。リアルな対面の場でも、オンラインの場でも、研修や講座の場でも、会議の場でも、JEEFのスタッフはほぼ全員がファシリテーションの役目にチャレンジし、成果を上げてきたと思います。JEEFの持つ広く多様な人材ネットワークという資源をより活かしてゆくファシリテーションの力。今後とも豊富な人的資源とファシリテーション能力をベースに、質の高い環境教育の企画と実践ができるNGOであり続けて欲しいと思っています。





ありがとう30周年

# 感謝を伝え 未来を創る

2022年でJEEFは設立30周年を迎えます。

1987年の清里ミーティングの事務局を母体として始まり、1992年のJEEF設立からこれまでのあゆみをまとめました。誌面の都合で取り上げられない大切な思い出がたくさんありますが、それだけたくさんの方々に、この30年支えられてきたのだと改めて身にしみました。

たくさんの方々のステークホルダーと関わりながら創ってきたこれまでの30年。さらにたくさんの方と関わりながら創っていきたいこれからの30年。今度はどんな新しい出会い（出来事）が待っているのか、胸を膨らませています。

30周年のテーマは「感謝を伝え、未来を創る」です。JEEFは新しい一歩をみなさんと一緒に踏み出します。

年	JEEFの動き
1987	第1回清里フォーラム（現：清里ミーティング）開催
1992	① 日本環境教育フォーラム設立 「日本型環境教育の提案」出版

## ① 日本環境教育フォーラム設立

「日本型環境教育の提案」の出版により「清里環境教育フォーラム実行委員会」は目的を達成し、解散する予定でした。しかし、フォーラム参加者のネットワークを

ここで途切らせるのはもつたない、活動をぜひ続けようという声があり、任意団体としてJEEFが発足しました。



## ② 機関誌「地球のこども」発刊

私たち人間を含むあらゆる生命が「地球のこども」であるという

想いから名づけられました。環境の分野で活躍される方のエッセイやインタビュー、自然学



校、教育現場からのレポートや海外の環境教育事情など、環境教育に関する幅広い情報を紹介しています。これまでに通算219号が発行されました。

## ③ 「市民のための環境公開講座」開始

企業とNPOとのパートナーシップの先駆けとして損害保険ジャパン（旧：安田火災海上保険）、SOMPO環境財団（旧：安田火災環境財団）との三者共催でスタート。これまでに延べ約3万人に受講いただきました。30年目を迎える2022年は「認識から行動へ」地球の未来を考える9つの視点」をテーマにオンラインで開催予定です。



1993	2 「市民のための環境公開講座」開始 3 「アメリカン・ネイチャー・ライブラリー」発刊
1994	「インタープリテーション入門」出版
1996	4 シンポジウム「自然学校宣言」開催
1997	環境庁所管「社団法人」へ移行
2000	「自然学校指導者養成講座」開始 「日中韓環境教育ネットワーク(T-E-E-N)」開始 「日本型環境教育の提案」改訂新版出版
2001	5 ジャパンGEMSセンター設置
2002	6 インドネシア事務所設置
2004	JEEF憲章制定
2005	7 愛・地球博「森の自然学校・里の自然学校」開校
2008	「日本型環境教育の知恵」出版
2010	内閣府所管「公益社団法人」へ移行
2013	8 「東京シニア自然大学」開校 9 バン格拉デシユでの事業開始
2017	設立25周年記念シンポジウム「環境教育の未来を考える」開催 10 経団連自然保護基金25周年記念事業「SATO YAMAMUMIプロジェクト」開始
2018	11 清里ミーティングが「環境大臣賞」を受賞
2020	12 「新型コロナウイルスによる自然学校等への影響調査」を実施 「第8回エクセレントNPO大賞」の「組織力賞」を受賞
2022	設立30周年

#### 4 シンポジウム「自然学校宣言」開催

自然学校の果たすべき課題や可能性を考えるシンポジウム「自然学校宣言」を開催しました。自然学校をはじめ行政や企業、NPO/NGOなどから約300名が参加。自然学校を社会に定着させた転機ともいえます。



#### 5 ジャパンGEMSセンター設置

カリフォルニア大学バークレー校内にあるローレンスホール科学教育研究所で開発された科学・数学の体験学習プログラムGEMS(Great Explorations Math and Sciences)のリソースセンターとして設置。これまでに日本語版が



イドブックを約35タイトル出版した他、約千名の指導者(GEMSリーダー)を養成しました。

#### 6 インドネシア事務所設置

インドネシア・ボゴールに現地事務所を設置。地域住民の生計向上と自然環境保全の両立を目指し、グヌン・ハリムン・サラック国立公園でのエコツーリズム事業やジャカルタ湾岸マングローブ林再生事業に取り組みました。また、次世代を担う環境人材の育成を目指し、NGOラーニング・インターンシップ・プログラムinインドネシア(主催:SOMPO環境財団)の現地事務局を2019年から担当しています。



7 愛・地球博「森の自然学校」  
里の自然学校」開校

「自然の叡智」をメインテーマに掲げて開催された愛知万博において「森の自然学校・里の自然学校」を開校。来場者に対してインタビュープログラムが自然体験プログラムを提供しました。185日間の会期中に約54万人がプログラムに参加しました。



8 「東京シニア自然大学」開校

「自然や環境について改めて学んでみたい」「自然をキーワードに仲間を作ってもらいたい」「第二、第三の人生を地域とともに健康で楽しく過ごしてもらいたい」を目的に「東京シニア自然大学」を開校。2022年からオンライン講座も取り入れた

新カリキュラムで、名称も

新たに「東京

ネイチャーア

カデミー」と

して再スター

ト予定です。



9 バングラデシュでの事業開始

バングラデシュ環境開発協会(BEDS)をパートナーとして事業を開始。世界自然遺産であるシンドルボンを中心に、天然はちみつ採集人の支援プロジェクトや6次産業化プロジェクトなど、インドネシアと同様に地域住民の生計向上と自然環境保全の両立を目指した活動を展開しています。



10 経団連自然保護基金  
25周年記念事業「SATO  
YAMA UMIプロジェクト」

コンサベーション・インターナショナル・ジャパン及びバードライフ・インターナショナル東京と連携して「アジア太平洋地域生物多様性保全にかかる次世代人材育成事業 SATO YAMA UMIプロジェクト」を実施。アジア6カ国・地域において環境教育教材やプログラムを開発し約5万人に提供した他、日本のユース12名をインターンとして派遣しました。



11 清里ミーツイングが  
「環境大臣賞」を受賞

環境生活文化機構主催「持続可能な社会づくり活動表彰」において、国際社会・地域社会への貢献、環境教育および生物多

様性保全活動等、豊かな環境を引き継ぐため、

環境・経済・社会が一体

となった持続可能な社会

づくりに資する活動とし

て、清里ミーツイングが

「環境大臣賞」を受賞

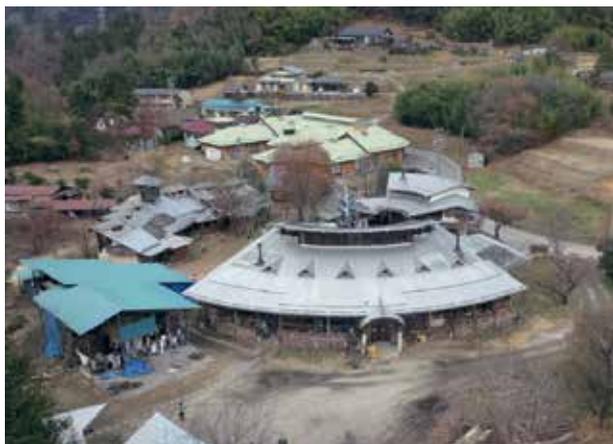
しました。



12 「新型コロナにより自然学校等  
への影響調査」を実施

自然体験活動推進協議会(CONE)、日本アウトドアネットワーク(JON)とともに「新型コロナウイルス感染症拡大に関する自然学校等への影響調査」を実施。コロナ禍で存続の危機に直面している自然学校の支援を目的に、関係省庁への要望書提出やクラウドファンディング「自然学校エイド基金」を設けました。





## 「おいしい」を シェアする仲間との暮らし



森 奈央美さん

グリーンウッド自然体験教育センター

文：垂水 恵美子（JEEF 職員）

国道も信号もコンビニもない、わずかに1500人ほどの山間の村「やまおかしむら 泰卓村」で山村留学を行うグリーンウッド自然体験教育センター（以下、グリーンウッド）では、食を通して「自分たち」で暮らしをつくることを大切にしています。「自分たち」とはこどもたちだけに限らず、相談員、保護者、地域の人、OB・OGなど関わっている大人たちが、つくることを楽しむパートナーとして含まれていきます。小さな山村で脈々と営まれた暮らしの文化が、グリーンウッドにとつては「学びの土台」です。

そんなグリーンウッドの食事風景の面白さは、決まったメニューが存在しないことです。こどもたちは冷蔵庫や食在庫にある食材や畑の野菜を見ながら話し合うところからごはん作りが始まるのです。慣れないうちは蹴立決めから一苦労！その中で、主菜・副菜・一汁は用意すること、作ったものは責任を持って全員で食べ切ること、どんな量でもみんなで分け合うこと

ルール。野菜くずや残り物はゴミではなく、堆肥や鶏のえきとして活用します。野菜づくりや米作りも後押しして野菜の皮や芯の美味しさなどにも気づくようになると、こども達はより大切に食材を扱うようになります。また、野菜くずが次の土を作り鶏の糞が土を豊かにすることを体験し、循環の中で生命がつながっていくことも感じています。

こどもが主役でつくる暮らしの中でも、一番の基本と言える「ごはん作り。その肝は「食べる相手がいる」ことです。相手への思いやり、食材を扱う責任や衛生管理、段取りなど気を配らなければならないこと

はたくさんありますが、「誰かのために」する方が自分のためよりも熱心に取り組めるものです。そのため学びがとて多いのです。ごはんを作ることを通して、気づかぬうちに人生を選ぶ力をも体得しているのではないかと思います。メンバーは小学〜中学生が半々くらい。年齢や経験に関わらず、お互いを補いつつ暮らしが成り立っています。

そして何より目の前に広がる自然の恵みがこの暮らしを包んでくれています。たくさんの人や自然との営みの中で自分たちが生かされているということ、理屈ではなく舌と心で感じてもらえているのかなと思っています。





# これまでとこれから

2021年度も新型コロナウイルスの影響が多方面にありました。そんな中、新しいパートナーからお声掛けいただき、新たな取り組みが始まりました。また、ジャパンGEMSセンターが設立20周年を迎え、GEMSを支えて下さったゲストを招いての周年イベントを行いました。

## 「100年後に生きる子ども達に感謝される森づくり」

メットライフ生命創立50周年記念事業の一環として、「100年後に生きる子ども達に感謝される森づくり」を



「メットライフ財団の森」除幕式

開始しました。JEEFネットワークのひとつであるNPO法人しんりん(※)と連携し、宮城県大崎市の「エコラの森」での活動を中心に、「環境保全」「ボランティア」「環境教育」からなるプログラムを実施していきま

す。乱伐され荒廃した森林からの再生を目指し、メットライフ財団の支援により植樹するエリアを「メットライフ財団の森」と命名。社員ボランティアの皆さまと、植林活動や、エコラの森から出た建築端材をアップサイクルした箸を製作して児童養護施設等に寄贈する「つなぐ！お箸プロジェクト」などに取り組みます。

健全な森林の育成を通して、気候変動や生物多様性の問題にアプローチするとともに、人と人、人と自然、人と社会をつなぐというJEEFらしいパートナーシップ事業を展開していきます。

## 狩猟・ジビエ普及推進事業

2021年11月、山梨県・キープ

協会にて小学生の親子を対象とした1泊2日の「狩猟&ジビエモニターツアー」を開催しました。募集開始ですぐに定員の倍以上の応募があり、参加者の並々ならぬ関心の高さがうかがえました。

大日本猟友会と連携して環境教育的視点から狩猟・ジビエの普及推進を目指す本事業。日本全国で大きな問題となっている野生鳥獣による農作物被害に対し、日本唯一の全国的狩猟団体である大日本猟友会と、環境教育のノウハウ、ネットワークを持つJEEFが協力して、鳥獣害の課題に取り組みます。

鳥獣害の問題には、里山が荒廃し食物を求めて人里に降りてくる動物の増大と、それによる農作物被害の増大、国内の狩猟免許保有者の減少、猟師の高齢化など、様々な課題が関わってきます。そこで、狩猟・ジビエの普及の方向性を話し合うため、有識者による検討委員会を立ち上げ、今度は千葉・埼玉などでもモニターツアーを行ないながら、全国の

※ NPO 法人しんりんは循環型林業とサステナブルなエコビレッジの実現を目指す団体です。



「狩猟&ジビエモニターツアー」 わな猫の実演の様子



「狩猟&ジビエモニターツアー」  
夜間の生き物の様子を録画するためにセンサーカメラをとりつける



ローレンスホール科学教育研究所 Suzanna Loper 氏の講演会

自然学校向けの狩猟・ジビエプログラム手引書を作成する予定です。

## 20周年 ジャパンGEMSセンター

2022年3月に記念講演会をオンラインにて開催。これまで長くジャパンGEMSセンターを支えてくださったローレンスホール科学教育研究所(LHS)のスザンナ・ローパー氏やトレーシー・シールズ氏、ジャパンGEMSセンター運営委員の本田恵

子教授(早稲田大学)、そしてアドバイザーの美馬のゆり教授(はこだて未来大学)から、GEMSのこれまでの発展プロセスと、これからの社会の中での役割についてお話をいただきました。

特にカリフォルニアからの中継となったスージー、トレーシー両氏のセッションでは、参加者から普段はなかなか聞くことができない本場LHS流のワクワクのつくり方やプログラムの組み方についての質問があり、両氏の

さすがの返しに参加者から感嘆の声があがっていました。情報量たっぷりの4セッションで、その日のうちには消化しきれないような濃密さでしたが、参加者限定で録画を公開し、それぞれのペースで学びほぐしをしていくように工夫。21年目も新しいチャレンジを続けていくエネルギーをいただきました。

## 2022年度に向けて

2013年から2019年まで7期開催し、その後コロナ禍で2年休校していた「東京シニア自然大学」を、「東京ネイチャーアカデミー2022(略称TNA)」に名称を改め、新カリキュラムで9月から再スタートします。

またベネッセこども基金との協働で、院内学級向けの動画作成も開始します。

新たな取り組みにどうぞご期待ください。

文：吹留純子(JEEF職員)



第35回

# 思考をくすぐる

子どもたちとワークショップをする中で感じたことを発信したいと始めたこの連載も、早いもので5年目となります。今シリーズではワークショップの中でよく受ける質問について、僕がどのように考えているかお答えします。

考えるって  
むしろいかも!?

## ”正解”が 1つでない問い

現代の複雑な社会問題は、「正解がない問い」や「正解が1つでない問い」と形容されることがあります。誰ひとり取り残されることのない課題解決ができる力を育てるために、学校で扱う課題についても探究的に、あらゆる角度から答えを模索していくことが求められるようになってきています。3月に開催したジャパンGEMSセンター20周年記念講演会でも、そんな問いに出会いました。

カリフォルニア大学の前ジャパンGEMSセンター担当スタッフのトレーシー・シールズさんが、コロナ禍のオンラインワークショップを紹介してくれたときのこと。とりわけ興味深かった問いが「3種類の生きものが出て、足の数の合計が12本になるんだけど、どんな生きものがあると思う？」というもの。みなさんならどう答えますか？

子どもたちは「タコが1匹と、あとは…」 「ちがうよ！ウマが1匹とね」と口々に答えます。でもこの問いに

は答えがたくさんありますよね。タコ(8本) + ネコ(4本) + ヘビ(0本) でもいいし、ウマ(4本) + アリ(6本) + ペンギン(2本) でもいいのです。こんなにもシンプルな問いでありながら、考え方の多様性や、それが尊重される感覚を味わうことができるのです。なんて素敵な問いなのでしょう！

## 何のために問うのか

わたしたち大人は、さまざまな目的で子どもたちに問いを投げかけます。こちらが伝えたことを覚えているか確認するため、子どもたちが何を考えている



か知るため、子どもたちの力を育てるため。大昔から教育の中で問いは大切にされてきました。

特に大切にされてきたのは、子どもたちの可能性を伸ばすために問うということです。大人が安心して満足したりするために1つの”正解”にたどり着くことをゴールにした問いではなく、子どもたちが考えること自体を楽しめるような、さまざまな答えの可能性がある問いを贈りたいのです。

そんな問いを通して考える楽しさにふれた子どもたちが、やがて自分で自分の思考をくすぐるような問いを見つけていけるようになったら、きつと彼らの人生も、彼らがつくっていく未来の社会も豊かになっていくはず。そんなことを思いながら、あそび心のある問いを日々考えています。

### 鴨川光

(かもがわ ひかる)

1987年茨城県生まれ。ジャパンGEMSセンター主任研究員。早稲田大学大学院教育学研究科修了後、2013年6月より現職。子どもの思考力や社会性の発達について研究している。ワークショップやボランティアを通して子どもたちと一緒に成長中。



「100年も先のことは、わからない」  
なんて言うのはやめよう。  
そう決めました。



サントリー  
天然水の森  
PROJECT.

サントリーの天然水は、森に降った雨が、  
およそ20年かけて  
森の大地でゆっくり濾過され、  
ミネラル分を授かって  
おいしくなった地下水。  
健やかな森の力を借りて生まれます。  
天然水を未来につなぐために、  
森を元気にする。  
それが私たちの大事な仕事になりました。  
これからも、ずっとずっと  
水と生きていきますように。



サントリー「天然水の森」は  
15都府県21カ所、総面積約12,000ha。  
これは、国内工場で汲み上げる地下水量の  
2倍以上の水を育む広さです。  
(2019年6月現在)

水と生きる **SUNTORY**

天然水の森

検索



## 幅広い市民に向けた学びの場

### 「市民のための環境公開講座」

損保ジャパン、（公財）SOMPO環境財団および（公社）日本環境教育フォーラムの3者共催で、NPO/NGOと企業のパートナーシップ協働事業の先駆けとして、1993年から30年にわたり一般市民向けに環境に関する講座を開講しています。

※今年度は2022年7月～11月に開講いたします。

詳細は右側の2次元バーコードからホームページをご参照ください。



#### ▼2022年度の講座より（一部抜粋）

##### 安定した地球環境（グローバル・コモンズ）を未来に引き継ぐために

石井 菜穂子氏

東京大学 理事  
グローバル・コモンズ・  
センター ディレクター



##### アドベンチャーレースの世界から見る自然界

対談

田中 陽希氏  
田中 正人氏

プロアドベンチャーレーサー  
「Team EAST WIND」所属



## 木を植える人を育てる

### 「CSOラーニング制度」



（公財）SOMPO環境財団では、大学生・大学院生を対象に、環境分野のCSO（市民社会組織、NPO/NGOを包含する概念）で8か月間のインターンシップに参加する「CSOラーニング制度」を実施しています。

2000年の開始以降、1,200名以上が本制度を修了しており、修了生それぞれが持続可能な社会の実現に向けて多方面で活躍しています。

2019年からは、新たに日本環境教育フォーラムと協働でインドネシアでのプログラムをスタートしました。これまで3期58名が修了し、2022年は第4期生が活動を開始しています。

損害保険ジャパン株式会社

〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1

Tel:03-3349-3111 <https://www.sompo-japan.co.jp/>

# トヨタ白川郷自然学校

## 2022年夏のご利用案内



TOYOTA Shirakawa-go Eco-Institute  
トヨタ白川郷自然学校

# 今度の休みは外へ行こう！

ホテルが付いた自然学校 ～白山麓の山里で どなた様でも遊べて泊られます～

## 自然体験プログラム

動物レザークラフト



渓流でイワナ獲り



朝の森の散歩



朝メシ前の昆虫ハイク



ワクワク！ナイトハイク



トヨタ 白川郷

05769-6-1187  
(9:00~18:00)

ご予約・お問合せはこちらから！

白水湖ラフトボートクルーズ

環境負荷ゼロ、難民ゼロをめざす  
エシカルパソコン



「この地球のために、何ができるだろうか」と考え、  
たくさんのこだわりを持って生まれたプロダクトです。  
使用済のパソコンを、日本に逃れてきた難民が再生し、  
エシカルパソコン・ZERO PC が生まれます。

## 想うプロジェクト

ZERO PC を購入すると、購入金額の 3%  
(毎月 21 日、キャンペーン月は 5%) を  
NPO に寄付することができる想うプロジェクト。

**JEEF も寄付先団体です！**

詳細はこちら



想うプロジェクト 検索

**ZERO PC 公式サイト**

<https://zeropc.jp/>

詳しくはメールかお電話  
または LINE で！

LINE の友達登録はこちら▼



TEL : 050-5328-8187

mail : zeropc\_shop@peopleport.jp

提供元：ピープルポート株式会社  
神奈川県横浜市港北区菊名 6-14-7

# 編集後記

文字数の関係で本編には乗り切らなかったエピソードや執筆者とのやり取りで印象的だったことなど、地球のこども編集委員会のメンバー制作の裏側をちょっとだけ紹介します。

今号の特集テーマを決めるきっかけになったのは、KURKKU FIELDS (2019) と morinos (2020) が立て続けにオープンしたことでした。しっかりと学ぶ要素もありつつ、環境にそこまで関心が高くない人たちも行ってみたいくなるような魅力を兼ね備えたこれらの施設が、ここ数年で各地にできてきています。まだ実際に訪れることができていませんが、本当は取材に行き子どもたちが味わっている感覚を僕も味わってみたいかった! やっぱり体験って大事だなあと今回の特集の校正をしながら改めて感じました。

鴨川 光



インタビューでは毎度、ページ内に収まらないたくさんの方のワクワクをもらいます。ついつい話が脱線してしまうことも多々ありますが、今回面白いと思ったのは「自然学校の台所」のインタビューで、こどもがスパイスからカレーを作ることに挑戦したという話! こどもの自主性に任せつつ、試行錯誤の様子を見守るグリーンウッドの方たちの愛情をととても感じ、あつというまにインタビューの予定時間が過ぎてしまいました。「環境教育人を訪ねて」「自然学校の台所」のインタビューは、毎回とても楽しみです。

垂水 恵美子



今回三富今昔村と自然歩道の記事の編集を担当させていただきました。

三富今昔村は以前訪問したことがあり、人と自然が共に暮らしているととても素敵な場所だなと思ったことを覚えています。廃棄物の処理についても学ぶことができるので、子どもにとっても大人にとってもよい学びの場だと思います。

自然歩道については、今回関東の道を取り上げています。私が九州出身でして、なかなか関東については詳しくないのですが、今回ご紹介いただいた自然歩道はとても魅力的です。普段ジムでは歩いていますが、自然歩道にも出かけようと思います!

山口 泰昌



千葉・木更津で生まれ育った私は、実家近くにオープンしたクルックフィールズに何度も行って、農・循環・食・アートを包含した空間に魅了されていました。今号特集検討会議でクルックフィールズを紹介したい! と強く主張したのです (^\_^) ホームページから執筆依頼したところ、窓口になってくださった吉田さんがなんと JEEF 事務局長と古くからの知り合いだったことが分かり驚いたものです。吉田さん、扉写真のご提供等本当に有難うございました。

今号が完成したら、編集チームみんなでクルックフィールズツアーを実現させたいです☆

吹留 純子



今回、地球のこどもの編集担当になりました加藤有美恵です。

今年の3月より JEEF に入局したばかりで、まだ日が浅い私ですが、既に JEEF に関わっていただいている多くの方々から環境教育に対する熱い想いを感じています。今回の地球のこども夏号では、そんな熱い想いを持った方からのお話やインタビューがたくさん詰まっています。実際、編集担当をした私自身、多くの化学反応がありました。手に取っていただいた方にも、この地球のこどもから心動かされるものがあつたら嬉しい限りです。

加藤 有美恵



地球のこどものバックナンバーを  
WEB でご覧いただけます。  
<https://www.jeef.or.jp/child/>



# 感謝を伝え、未来を創る

JEEFは今年30周年を迎えます。皆様に支えて頂いて、環境教育の普及・啓発に取り組んできました。これからも持続可能な社会づくりを担う人材の育成を目指し、様々な形でのご支援をお願いします。

## 会員になる



<https://www.jeef.or.jp/joinus/>

機関誌「地球の子ども」年2回お届け・JEEF主催事業割引・メルマガへの情報掲載など特典があります。

- ・ 普通会員 年会費 6,000 円
- ・ 学生会員 年会費 3,000 円
- ・ 団体普通会員 年会費 20,000 円 入会金 10,000 円
- ・ 賛助会員 年会費 一口 100,000 円

## 寄付をする



<https://www.jeef.or.jp/joinus/#tab02>

頂いた寄付は、主に下記の活動のために使わせて頂きます。

- ★自然の中に出かける機会が少ない子どもたちに向けた、身近な自然を感じる環境教育プログラムの提供。
- ★社会生活を営むうえで困難や心配を抱える方々に向けた、自然の魅力・癒しを体感できる環境教育の推進。

是非この機会に寄付をととして日本の環境教育を応援してください。

2000円以上のご寄付いただいた方にSDGsバッジを、5000円以上の方にはオリジナル野帳もプレゼントします。



### ●マンスリー寄付

クレジットカードで毎月同じ額を寄付する仕組みです。

### ●一般寄付

任意の額を寄付する仕組みです。クレジットカード・銀行振り込み・郵便振替でうけたまわります。

## パソコンを購入する



<https://zeropc.jp/>

「ピープルポート」が製造・販売する、環境負荷ゼロを目指すエシカルパソコン「ZERO PC」。

廃棄されたパソコンを修理・再生し、販売しています。製造過程で難民支援も行なっています。

売上の3%（毎月21日は5%）がJEEFに寄付されます。



## フリマの売り上げを寄付する



[https://www.mercari.com/jp/help\\_center/article/978/](https://www.mercari.com/jp/help_center/article/978/)

フリマアプリ「メルカリ」の売上金（メルペイ）を循環型社会に普及する団体へ寄付する仕組み「メルカリ寄付」。JEEFは寄付先団体に選出されています。



寄付についてのご相談は、お気軽に担当までご連絡ください。

**寄付担当**

吹留（ひいどめ）、加藤

電話：03-5834-2897 メール：kifu@jeef.or.jp



website <https://www.jeef.or.jp/>

facebook <https://www.facebook.com/NGO.JEEF>

「地球の子ども」2022年夏号（通巻219号）2022年7月1日発行 公益社団法人 日本環境教育フォーラム  
〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-38-5 日能研ビル1階 TEL：03-5834-2897 FAX：03-5834-2898 E-mail：nl@jeef.or.jp  
発行人：阿部治 企画／編集：『地球の子ども』編集チーム © Japan Environmental Education Forum Printed in Japan 価格：1,200円（税込）

